

子育て支援事業へのボランティア参加学生の学びについて

Study on the learning of volunteer students
to Child-Raising Support Center of Tezukayama University

岡澤 哲子* ・ 清水 益治**
Tetsuko Okazawa Masuharu Shimizu

和文要旨

本研究は、帝塚山大学子育て支援センターの「つどいの広場」に、授業ではなく『自主的に』ボランティアを希望して参加した学生の学びを具体的な成果として検証する目的で行われた。2011年11月～2015年10月の間の学生ボランティア45名（複数回参加者あり）の参加後アンケートの自由記述文すべてを、KHCoderを用いて分析した。その結果、ボランティアを継続するにしたがって、「子ども」という一般的な記述から個人を示す「子」という記述に、さらに自分自身から「子」が主語となる記述に変化していた。このことから、「つどいの広場」への自主的なボランティア参加は、子育て支援を目的的に対応できる保育者への学びになることを成果として示すことができた。

はじめに

帝塚山大学子育て支援センターは2009年設立以来、地域の子育て力向上をめざす事業展開をしながら地域の子育て支援の拠点としての役割を果たしてきた。それとともに、こども学科で保育士養成機関として学生が学ぶ教育環境としての役割も果たし、学生に様々な場を提供してきた。そして、その場のひとつとして、子育て支援センター事業「つどいの広場」での学生ボランティア参加を学生に勧めてきた。しかし、学生の参加意欲は十分に高いとはいえない。

「つどいの広場」へのボランティア参加は、子育て支援に係る保育者の専門性を身に付けていくことができる教育環境である。しかし、ボランティア参加したことの成果が示されてきていなかったため、学生の参加意欲をさらに高めていく方策への手がかり、そして子育て支援センターの学生ボランティアの体制の改善への手がかりが得られにくかったと考えられる。

松原（2015）は、保育園にある子育て支援センターや大学併設の子育てに関連する施設におけるイベントへの学生参加が、保育者をめざす学生の遊びの実践力の育ちとなることを検証している。しかし、子育て支援の場を、そのような学生の保育実技の練習場所だけにとどめてはいけなないと考える。岡澤（2003）が明らかにしたように、子育て支援に対応する保育者養成機関の課題のひとつは、少子化の対応策としての手段的な対応ではなく、子育て支援に目的的に対応できる保育者の専門性を育成することである。竹之下ら（2011）、清水ら（2013）、清水ら（2014）、平松（2014）、清水ら（2015）の報告は、単に保育技術の体験でなく、保育という仕事の専門性への意識の深まりに言及している。また、本学の子育て支援センターの「つどいの広場」に学生が『授業として』参加したことの成果として、西村ら（2016）は、大学1年生を対象にして、こども理解やその能力への自己評価に影響を及ぼすことを明らかにした。

本研究は、本学の子育て支援センターの「つどいの広場」に、授業としてではなく『自主的に』ボランティアを希望して参加した学生の学びが、子育て支援に目的的に対応できる保育者の主体的な専門性を育成するための成果であることを検証する目的で行われた。

*こども学科教授 **こども学科教授

方法

1. 協力者

2011年11月～2015年10月に、つどいの広場に「つどいの広場 絵本・手あそび活動ボランティア」として参加した45名の学生に研究に協力してもらった。つどいの広場の詳細については、本誌の勝美(2016)を参照されたい。

2. 手続き

①アンケート用紙：図1に示すアンケート用紙を作成した。

| |
|---|
| 平成 年 月 日 |
| つどいの広場 絵本・手あそび活動ボランティア |
| ボランティア参加 アンケート |
| 本日は、ボランティア参加お疲れ様でした。 気づいた点、反省点、感想など、自由に書いて下さい。 |
| ① 絵本読みについて |
| <u>読んだ絵本名</u> |
| <u>対象年齢</u> |
| [] |
| ② 手あそびについて |
| <u>手あそび名</u> |
| <u>対象年齢</u> |
| [] |
| ③ 上記以外の場面について |
| [] |
| ④その他 |
| [] |
| こども学科 学籍番号： T09 氏名： _____ |

図1. 本研究で用いたアンケート用紙

②ボランティアの募集


前期のつどいの広場に対しては前年度3月に実施している前期履修ガイダンスで、後期のつどいの広場に関しては9月に実施している後期履修ガイダンスで行った。その際、図2のような募集のチラシを用いた。

③ボランティアの役割の説明

応募してきた学生に対して、主として絵本を読んだり、手遊びをしたりするというボランティアの内容を説明した。絵本については、子育て支援センターにある本を用いても良いし、図書館などで借りたり、自分のものを用いたりしてもよいこととした。手遊びは、当日のボランティアの人数が1人の場合は1人で実施したが、複数人の場合は、全員で1つまたは2つの手遊びをすることにした。絵本読みと手遊び以外の時間は、子どもと直接関わってもよいこととした。学生が求めた場合、絵本と手遊びの指導は、支援センターの職員があたった。

ボランティアの終了後、図1に示したアンケートに答えるように求めた。なお、このボランティアは無償ではなく、実際にはクオカード（1000円）を渡した。

「つどいの広場」で絵本を読んだり、手遊びをしてみませんか



毎週木曜日 10時～12時の間、1階まつぼっくりの部屋に3歳未満の子どもたちと保護者の方々が集って交流を楽しんでいます。

この「つどいの広場」に参加（木曜日の午前9時50分～12時まで）し、子どもたちや保護者に絵本を読んだり、手遊びを楽しむ学生を募集します。

子どもたちと絵本や手遊びを通して触れあいたいと思う方は、下記申し込み書に都合のよい日程の欄に丸印を記入し1階まつぼっくりの部屋の前「申込書入れ」に入れてください。

ここに日程と募集人数が入る

申し込み締め切り 月 日

学籍番号 _____ 名前 _____

電話番号 _____ メールアドレス _____

図2. ボランティア募集のチラシ

結果と考察

1. ボランティアをした学生の特性

ボランティアをした学生の内訳は、男性が6名、女性が39名であった。平成9年度入学生としては8名、10年度生が11名、11年度生が12名、12年度生が9名、13年度生が4名、14年度生が1名、であった。13年度と14年度が少なかったのは、時間割上、前述の調査時期の該当時間に必修科目が入っており、開講期間中には参加が困難だったからである。また、15年度生がいないのも同様の理由である。ボランティア学生募集と時間割やカリキュラムと子育て支援センター事業のスケジュールに関しては、再考を要するところであると考えられる。

図3は、ボランティアの実施回数と人数の関係を示したものである。最も人数が多かったのは2回で、次が1回、さらに4回と続いていた。回数が最も多かったのは19回、次いで18回であった。

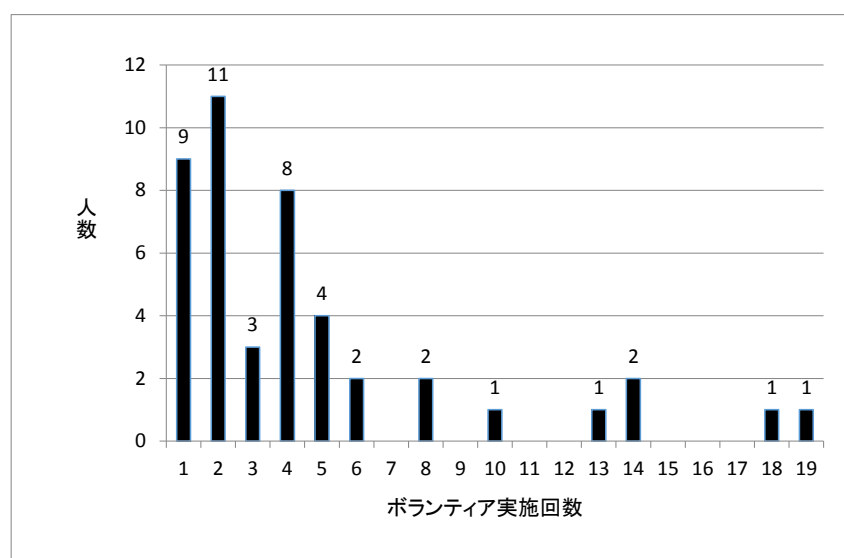


図3. ボランティアの実施回数とその人数

2. 自由記述の内容

自由記述をすべてテキストファイルとして入力した。分析には KHCoder を用いた。出現回数が50以上の抽出語と、その出現回数を示したものが表1である。「思う」が最も多く、「子ども」「子」と続いていた。「思う」について文脈を調べたところ、主語が協力者（ボランティアをした本人）であることが明らかになった。

「子ども」と「子」の違いを調べるために、それぞれの語が使われた文脈を調べた。その結果、「子ども」は文頭で使われたり、「子どもと関わる」「小さい子ども」などのように、一般的な子どもや不特定多数の子どもの意味で使われたりしていることが多かった。これに対して「子」は、文頭で使われることはなく、「手遊びに夢中で他の子供とぶつかる子」「最初興味がなかった子」など、特定の子を指す文脈で使われることが多かった。

次にボランティアの実施回数とこれらの抽出語の関係を調べた。その結果が表2である。図3に示したように、1回だけしかボランティアをしなかった学生は9名であった。しかしながら、他の協力者も、1回目のアンケート

表1. 頻出単語

| 抽出語 | 出現回数 |
|------|------|
| 思う | 389 |
| 子ども | 225 |
| 子 | 179 |
| 絵本 | 137 |
| 読む | 136 |
| 子供 | 135 |
| 手遊び | 118 |
| 遊ぶ | 118 |
| 一緒 | 105 |
| 楽しむ | 88 |
| 見る | 85 |
| 良い | 85 |
| 多い | 80 |
| 今日 | 77 |
| 楽しい | 76 |
| 感じる | 76 |
| 少し | 73 |
| 声 | 70 |
| 関わる | 68 |
| お母さん | 65 |
| 難しい | 57 |
| 嬉しい | 51 |

は書いている。そのため第1回 (Session01) の記入者は45名である。同様に第2回 (Session02) のアンケートの記述は11名ではなく、45名から9名を除いた36名である。このような計算から、第3回 (Session03) は25名、第4回 (Session04) は22名、第5回 (Session05) は14名、第6回以降 (Session06-) は10名である。なお第6回以降については、これ以降の記述を全て込みにした。すなわち19回ボランティアに参加した者の場合は、6回目から19回目までのすべての記述を含んでいる。単語の横の数値は、その語が各回にどの程度特徴的かを示す Jaccard 係数である。

第1回 (Session01) では「子ども」が上位に来ているのに対して、第3回 (Session03) 以降には「子」が出現し、第6回以降 (Session06-) には「子」しか出現していない。また、第1回 (Session01) では「思う」「楽しい」「感じる」「関わる」など主語が協力者であるのに対して、第2回 (Session02) 第4回 (Session04) 第5回 (Session05) では「楽しむ」、第3回 (Session03) と第6回以降 (Session06-) では「見る」、さらに第6回以降 (Session06-) では「覚える」など主語が子どもの単語が頻出していることが明らかになった。

これらの結果から、ボランティア参加を継続することで、自分自身がどのような行動をしたかについての自己評価的な興味ではなく、次第に子どもそのものの行動やその見取りに意識が向いていくことが明らかとなった。そしてさらに、漠然とした「子ども」への理解だけでなく、個として「子」を理解しようとして、子どものことをより観察する姿勢が高まることが示された。

表2. 参加回毎に見た頻出単語

| Session01 | | Session02 | | Session03 | | Session04 | |
|-----------|------|------------|------|-----------|------|-----------|------|
| 思う | .179 | 思う | .127 | 子供 | .087 | 子供 | .110 |
| 子ども | .146 | 子ども | .114 | 子 | .076 | 子 | .072 |
| 手遊び | .074 | 関わる | .055 | 一緒 | .074 | 多い | .067 |
| 良い | .063 | 前回 | .054 | 感じる | .059 | 参加 | .062 |
| 楽しい | .053 | 難しい | .052 | 読む | .058 | 声 | .060 |
| 少し | .050 | 楽しむ | .050 | 見る | .053 | シャボン | .059 |
| 感じる | .047 | 感じる | .049 | 保護 | .052 | 楽しむ | .054 |
| 初めて | .046 | 良い | .048 | 楽しい | .046 | 絵本 | .054 |
| 関わる | .043 | 出来る | .045 | 少し | .042 | 感じる | .047 |
| 声 | .043 | お母さん | .043 | 興味 | .042 | 行く | .044 |
| Session05 | | Session06- | | | | | |
| 子 | .064 | 遊ぶ | .093 | | | | |
| 子供 | .062 | 子 | .092 | | | | |
| 今日 | .054 | 絵本 | .081 | | | | |
| 多い | .048 | 今日 | .075 | | | | |
| 聞く | .047 | 読む | .073 | | | | |
| 楽しむ | .046 | 一緒 | .061 | | | | |
| 読む | .044 | 見る | .055 | | | | |
| 少し | .043 | 良い | .051 | | | | |
| 嬉しい | .042 | 多い | .050 | | | | |
| 手遊び | .040 | 覚える | .045 | | | | |

総合的考察

以上、本研究の結果と考察から、本学の子育て支援センター「つどいの広場」への自主的なボランティア参加は、学生を子どもそのものの行動や見取りに意識を向けていくことのできる教育環境であり、またボランティア参加することで漠然とした「子ども」への理解だけでなく、個として「子」を理解しようとして、より観察する姿勢が高まることが示された。これらは、子育て支援に目的的に対応できる保育者の主体的な専門性を育成するための学びになるという成果であり、ボランティア参加者の募集においてアピールできる点であると考えられる。しかし、このボランティア参加は、継続して行

うことがさらにその成果を上げることも示された。木村ら（2012）が述べるように、活動継続には、学生相互の支えや組織内の対話や情報交換が必要である。ボランティア体験を「経験」として学生個人の学びに資するだけでなく、ボランティア参加の体制の改善、例えば時間割の再考、ボランティア学生への事前指導、下級生への報告会開催などをすることも必要であるのではないかと考える。

本研究は、昨年末に出た中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」にある学校インターンシップの評価に関して応用が可能である。具体的には、本研究で用いた研究手法、すなわち、全く同じ内容を尋ねる自由記述形式のアンケートに繰り返して回答を求め、それを分析するという手法は、学校インターンシップの評価に活用できる。この方法だと、インターンシップを重ねれば重ねるほど、より深い内容を書くようになることが予想される。人数が増えれば、その深い内容の更なる分析も可能になる。実践研究が期待される。また、本学のディプロマ・ポリシーのうちのひとつ「保護者や地域社会と関わり、連携することを通して、子どもの健全な成長を支援することができる」学生の育成にとって、子育て支援センターへのボランティア参加がよりよい教育環境となることをさらに願いたい。

参考文献

- 中央教育審議会 これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）、2015.12
- 平松紀代子：保育者養成校での保育士の専門性を高める試みー地域子育て支援プログラムの一次保育の体験を通じた「反省的実践」一、京都聖母女学院短期大学研究紀要、43、pp.45-58、2014.3
- 木村 千里・池田 真弓：地域子育て支援における大学生ボランティアのボランティアモチベーションと活動継続、日本保健科学学会誌 15、p.24、2012.9
- 松原敬子：子育て支援における学生の育ち、植草学園短期大学研究紀要、16、pp.31-37、2015
- 西村真実・石田慎二・岡澤哲子・清水益治：DVDを用いた子どもとの関わり記録作成の効果Ⅳ、帝塚山大学現代生活学部紀要、12、pp.95-104、2016.2
- 岡澤哲子：子育て支援に関する保育者養成機関の課題（1）、甲子園短期大学紀要、22、pp.37-44、2003
- 清水益治・小椋たみ子・松尾純代・鶴宏史：DVDを用いた子どもとの関わり記録作成の効果、帝塚山大学現代生活学部紀要、9、pp.53-64、2013.2
- 清水益治・小椋たみ子・松尾純代・鶴宏史：DVDを用いた子どもとの関わり記録作成の効果Ⅱ、帝塚山大学現代生活学部紀要、10、pp.123-137、2014.2
- 清水益治・小椋たみ子・西村真実・石田慎二：DVDを用いた子どもとの関わり記録作成の効果Ⅲ、帝塚山大学現代生活学部紀要、11、pp.85-94、2015.2
- 竹之下典祥・馬見塚珠生：学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的変化の質的調査研究ーSCAT法導入による実習体験過程の理論的仮説生成の試み一、京都文教短期大学研究紀要、50、pp.70-81、2011